

# 「私」のネットワーク としての時空、そして歴史

立命館大学 衣笠総合研究機構 専門研究員

柳川耕平

## 今日のお話の概略①

- ▶ フッサールの現象学的時間論をベースにした話をします。  
(「フッサール」も「現象学」も導入で軽く説明します)
- ▶ 今日の話は「意識・経験とは無関係な客観的な時間」の話  
**ではありません。**
- ▶ フッサールが考えていた時間は、「私」のネットワークとして解釈可能であり、その理解を基にして「歴史」について考える、  
という話をします。

## 今日のお話の概略②

1. 導入
2. 「普遍的な構造としての主観的時間」とその成立について
3. 「私」のネットワーク
4. 「空虚で整然としたネットワーク」から  
「具体的で歪なネットワーク」へ  
あるいは、  
「均質・不変の時間」から「不均質・偶然の歴史」へ

※後半に行くにしたがって柳川オリジナルの解釈が増えています。  
フッサール研究全体の通説を反映しているわけではありません。  
(可能な限り典拠は示します)

# 1. 導入

## 1-1. フッサールの概略

- **1859年生まれ、1938年死去。** オーストリア帝国プロスニッツ（現チェコ共和国モラビア）出身のユダヤ人。ドイツのゲッティンゲン大学、フライブルク大学などで教鞭をとる。
- 最初は**数学**を志し、ヴァイヤーシュトラス、クロネッカーに師事。後に**ブレンターノ**に感銘を受け師事、哲学に転向。
- 著作を通じて**W. ジェームズ**から影響を受ける。また、弟子のインガルデンなどを通じて**H. ベルクソン**の思想を知り共感。
- **シュタイン、シェーラー、ハイデガー、レヴィナス**などが主な弟子。
- 主な公刊著作として『論理学研究』『イデー』『デカルト的省察』『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』などがあるが、膨大な研究草稿も残っている。

## 1-2. 現象学の概略

- ➡ フッサールによれば、**19世紀末～20世紀前半は学問の危機の時代。**

「われわれはまず、前世紀の終わりごろから現われた、学問に対する一般的な評価の転換ということから議論を始めよう。その評価の転換というのは、学問の学問性にかかわるものではなく、むしろ学問一般が、人間の生存にとって何を意味してきたか、また何を意味することができるか、という点にかかわるものだ。〔…〕単なる事実学は単なる事実人をしかつくりません。〔…〕この学問は、この不幸な時代にあって、運命的な展開にゆだねられている人間にとっての焦眉の問題を原理的に排除してしまうのだ。その問題というのは、この人間の生存全体に意味があるのか、それともないのかという問いである。」 (VI 3-4)

- 学問が客観性、抽象性を追求し、主観的、具体的なものを排除した結果、生について重要なことを何も教えなくなった。(=危機)。
- ➡ 意識・経験 (= 生) を記述、分析して普遍的な構造を取り出し、意識・経験と、そこから独立している (ように見える) ものとの関係を論じるのが**現象学**。



## 1-3. 現象学的時間論の概略

- この構図は時間論においても見られる。
- 時間というものは世界の側に流れているもので（**客観的な時間**）、これは意識あるいは**主観的な時間**からは独立と、通常は考えられている。

↓ 現象学的時間論では...

- 意識を記述・分析し、その普遍的構造としての（**主観的**）時間を取り出し、そこから独立しているように見える**客観的な時間**との関係を論じる。

「時間流の中で、過去への恒常不断の沈み込みの中で、一つの、流れない、絶対的に 確固たる、同一的な、客観的時間が構成される」(X 64)

※ただし、議論の抽象度がやや高く、意識・経験を「記述」しているか、やや怪しい。

## 1-4. 時間の階層性

- ➡ フッサールが考えていた時間の階層構造(cf. 谷[1998: 381])
  - A. 絶対時間・宇宙時間（意識から切り離された客観的時間）
  - B. 現象学的時間・「客観的」時間（意識から見た客観的時間）
  - C. 時間流・意識流・体験流（普遍的な構造としての主観的時間）
  - D. 「生き生きした現在」(時間の根源)
- ➡ 現象学の主題はB. C. D.(今日のお話はB. C. メイン。)



## 1-5. 問題意識

「時間流の中で、過去への恒常不断の沈み込みの中で、一つの、流れない、絶対的に確固たる、同一的な、客観的時間が構成される」(X 64)

「おのれの諸位相と諸区間をもつ体験流は、それ自体ひとつの統一性である」(X 116)

- a. そもそも時間流・体験流（＝「沈み込み」、「統一性」）はどのようにして成立するのか？
- b. 体験流と客観的な時間の関係はどうなっているのか？

※ここでは現在→過去の流れだけが言及されているが、時間流・体験流には未来→現在の流れも含まれる。

## 1-6. 体験流について

- 一つの体験は、恒常的で順序的な秩序と、統一性を持つ。これは私の複数の体験同士の間でも同様。
- 順序的な秩序を持った体験（の統一体） = 時間流・体験流・意識流
- 体験流は私の体験の中で成立する（「自己構成する」）。
- 私の体験流に属するのは私の体験だけで、私の体験が属するのも私の体験流だけ。他者も同様。

「各体験は一つの無限な『体験流』に属している」(III/i 182)

## 1-7. 志向性について

➤ フッサールは意識の、「何かに向かっていて」という性格を志向性と呼び、現象学的考察の鍵概念とした。

→あらゆる意識はその志向性に関して分析可能。

※志向性は能動的・自覚的なものだけでなく、非能動的（「受動的」）・無自覚的なものも含む

➤ 志向性の向かう先には自我極、出発点には対象極が見出される。

※ただし、これは「まず対象極、自我極が無ければ志向性は成立ない」ということを含意しない。



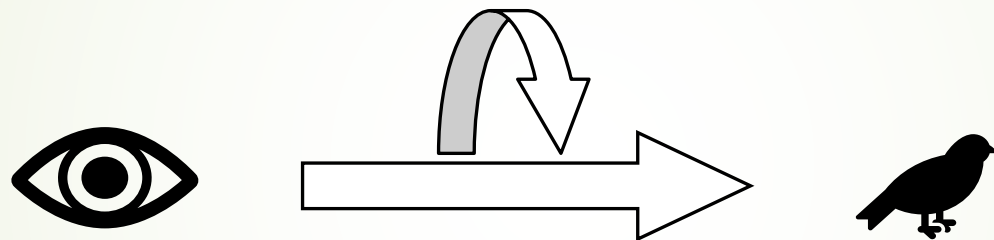
## 2. 「普遍的な構造としての主観的時間」とその成立について

## 2-1. 考察の出発点としての知覚

- 知覚経験、特に、時間的な広がりのある対象の知覚経験を記述。  
(たとえば初期ではメロディ、中期では雑音など)
  - 知覚経験における事実から時間についての分析・考察を始める。
1. 「内的意識」、自己知覚
  2. 知覚の時間的地平構造
  3. 恒常的な連続としての体験流

## 2-2. 「内的意識」、自己知覚

意識が何かしらの与件・対象を志向する場合、常にその意識それ自体も知覚されている。これらは一つの体験における二つの側面。



「したがって、ある種の意味において全ての体験は印象によって意識されている、あるいは印象化されている。〔中略〕知覚することはある対象についての意識である。それは意識としていちどきに *zugleich* 印象であり、ある内在的な現在なのである」(X 89)

「しかし内在的諸与件についての知覚が実際に知覚されており、しかもそれらが時間的なものとして、それらと同一的ではない、それらを掴み出すような諸体験において構成されるという仕方で知覚されているということが告げ知らされている場合、これ〔=内在的諸与件の知覚自身に対する知覚〕はただ『内的意識』でのみあり得るのであり、その内的意識は、事実、統一的な知覚することなのである」(XXXIII 107-108)



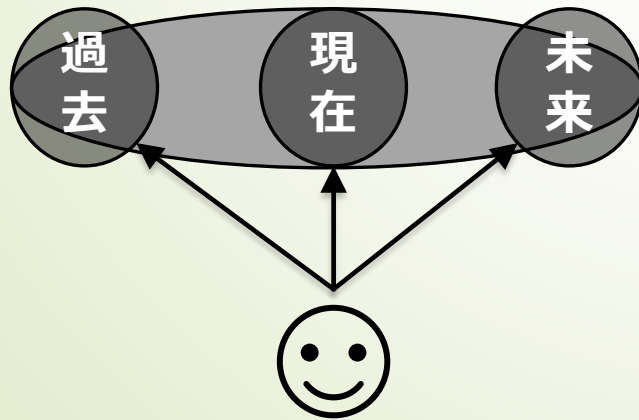
## 2-3. 知覚における現在の幅

知覚においては瞬間的な今だけではなく、過去や未来といった非－今も与えられている。これらは互いに区別されつつも不可分。

→知覚における今・現在は幅（＝「**時間の庭 (暈)Zeithof**」）を持つ。

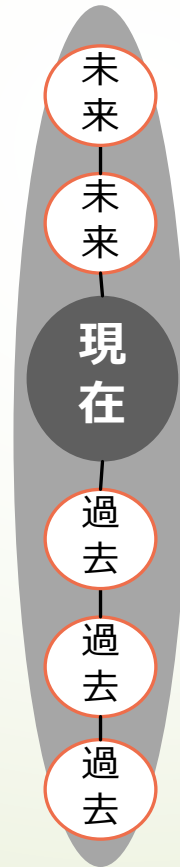
➡ 過去は**把持**志向によって保持され、今は**原印象**志向によって捉えられ、未来は**予持**志向によって先取りされている。

「知覚はいずれもみな、その把持的および予持的な庭を持つ」 (X 105)



## 2-4. 恒常的な連続としての体験流

知覚には絶えず新しいものが与えられ、それらは順序・秩序のある統一体、体験流として成立している。  
諸々の過去・未来は雑多で野放図な寄せ集めではない。



## 2-5. 体験流はどのように成立するか？

「しかし、音-今についての意識、[つまり]原印象が把持へと移行する場合、この把持自体も再び一つの今であり、一つの顕在的な現に存在するものなのだ。〔中略〕しかし、意識のいずれの顕在的な今〔=前出の把持〕も変様の法則に服している。意識のいずれの顕在的な今も〔=前出の把持〕把持の把持へと変転し、絶えずそうなのである。上記に従って、各々の以後の点は、以前の点に対して把持であるというように、把持の絶えざる連続体が生じてくる」(X, 29)

- 把持の志向性それ自身も（原印象同様）「一つの今」に含まれ、その「一つの今」がまるごと把持的に変様する。
- 結果、「把持」は「把持の把持」になり、「絶えずそうなのである」。
- これによって「把持の絶えざる連続体」、体験流が成立。
- どうということ？

## 2-6. 引用

「この〔体験流の〕統一性は、その流れそれ自体の事実によって原本的に構成される。その事実とは、その固有の本質が、単にそもそも〈ある〉というだけにとどまらず、〈体験統一性である〉ということ、そして〈内的意識——この内的意識において《注意する光線〔＝反省〕》が〔意識の〕流れ〔それ自体〕に向かうことができる——のうちで与えられてある〉ということである。」 (X 116)

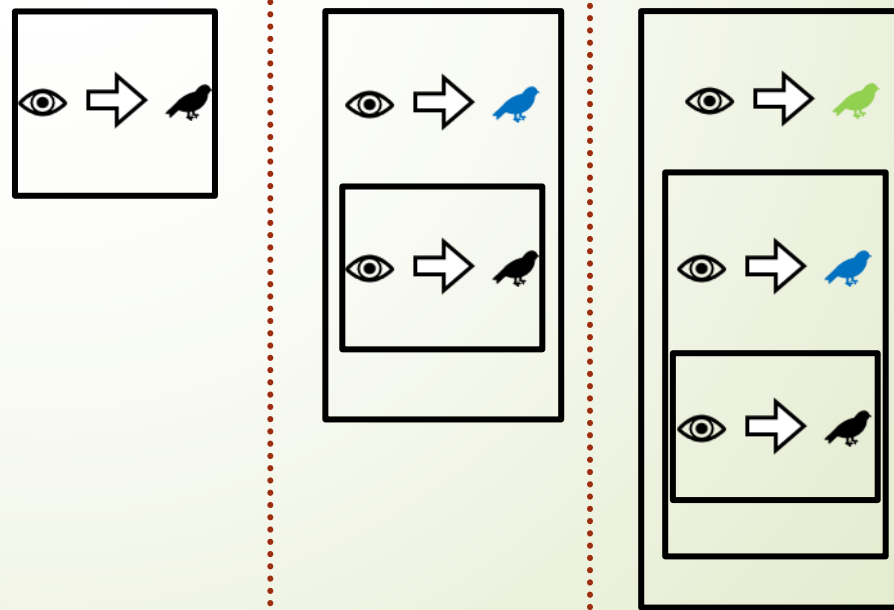
→ 「内的意識」・自己知覚によって体験流が統一体として与えられる

「『内的』諸把持による統一性としての流れ」 (X 118)

→ 把持的連続体としての「体験流」

## 2-7. 図解

「しかし、音-今についての意識、〔つまり〕原印象が把持へと移行する場合、この把持自体も再び一つの今であり、一つの顕在的に現に存在するものなのだ。〔中略〕しかし、意識のいずれの顕在的な今〔＝前出の把持〕も変様の法則に服している。意識のいずれの顕在的な今も〔＝前出の把持〕把持の把持へと変転し、絶えずそうなのである。上記に従って、各々の以後の点は、以前の点に対して把持であるというように、把持の絶えざる連続体が生じてくる」(X, 29)



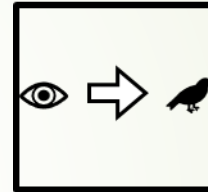


## 2-8. 自己知覚の入れ子構造①

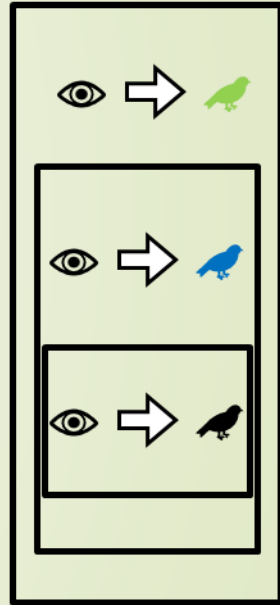
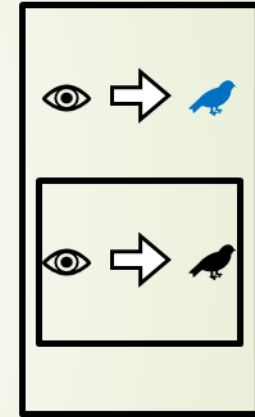
- ある瞬間の意識の働きは（自己知覚的な）原印象で捉えられている



- 新しい与件が捉えられる
- 新しい与件を捉えた働きも合わせて、  
知覚の働き全体が自己知覚的原印象で捉えられる。



- 以下繰り返し
- 知覚プロセスの進展とともに、  
自己知覚（図の中の□）が重層的になっていく。



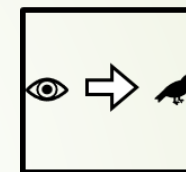


## 2-9. 自己知覚の入れ子構造②

- ➡ それぞれの「位相Phase」の間には重層性の差異がある。この差異は知覚プロセスが進展しても変わらない。

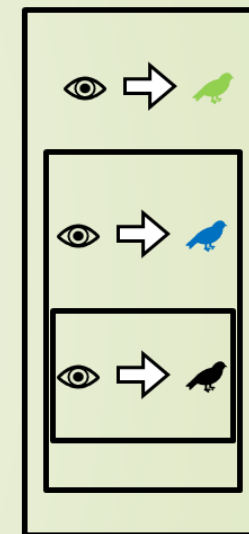
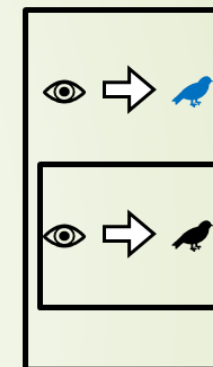
→ 体験の順序的な秩序

※ 位相間の階層差は（いわば）デジタルではなくアナログ



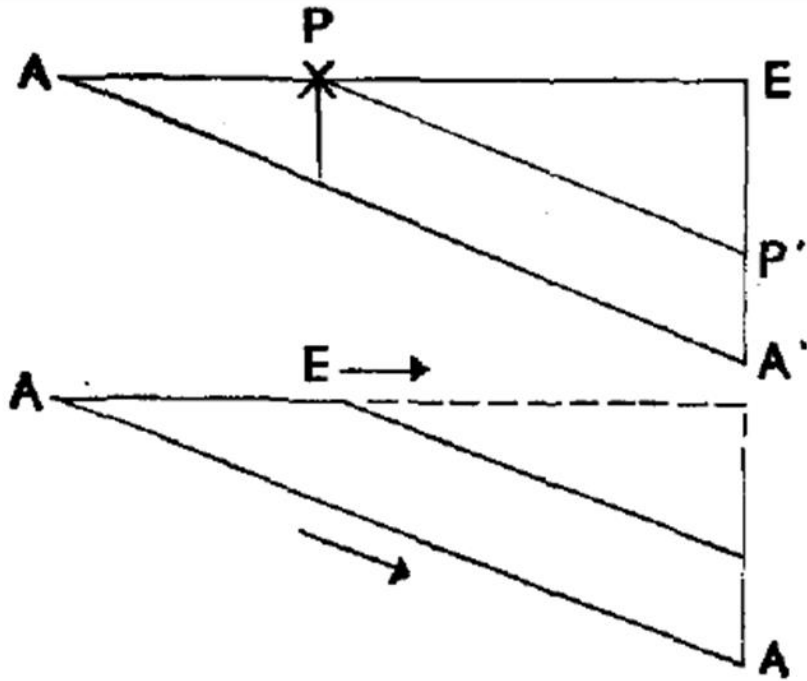
- ➡ 知覚プロセスの各瞬間の意識は、自己知覚によって統一的に捉えられている。

→ 体験の統一



- ☆ 自己知覚が把持的な連続体、体験流をもたらす！

## 2-10. フッサールの図① (X 28)



AE — Reihe der Jetztpunkte.

AA' — Herabsinken.

EA' — Phasenkontinuum (Jetztpunkt mit Vergangenheitshorizont).

E → — Reihe der ev. mit anderen Objekten erfüllten Jetzt.

## 2-11. 補足

- 「把持の把持」と同様、予持の予持も成立する。予持的連続体、体験流の予持側も成立する。

「各々の後続の把持が先行の諸々の把持の系列へと関係するように、各々の先行の予持は、予持的連続体において、各々の後続の予持に関係するのである」(XXXIII, 10)

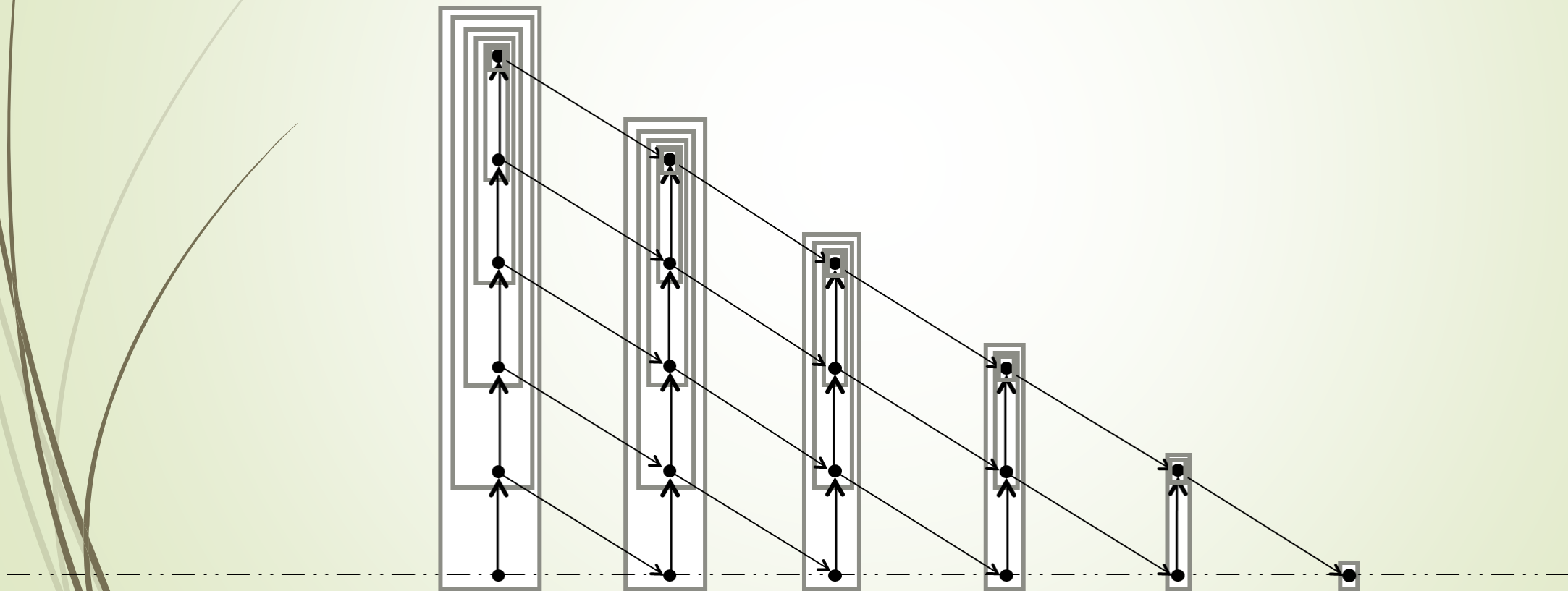
- 「かつての原印象 (= 把持)」「かつての把持 (= 把持の把持)」と同様、「かつての予持 (= 把持の予持)」も自己知覚によって捉えられている。

「その際にはしかし、次のことがよく考えられなければならない。すなわち過程の中途において、各々の把持は以前に充実された予持の把持であり、また、予持の空虚地平の把持でなければならないということ〔中略〕である」(XXXIII 14)

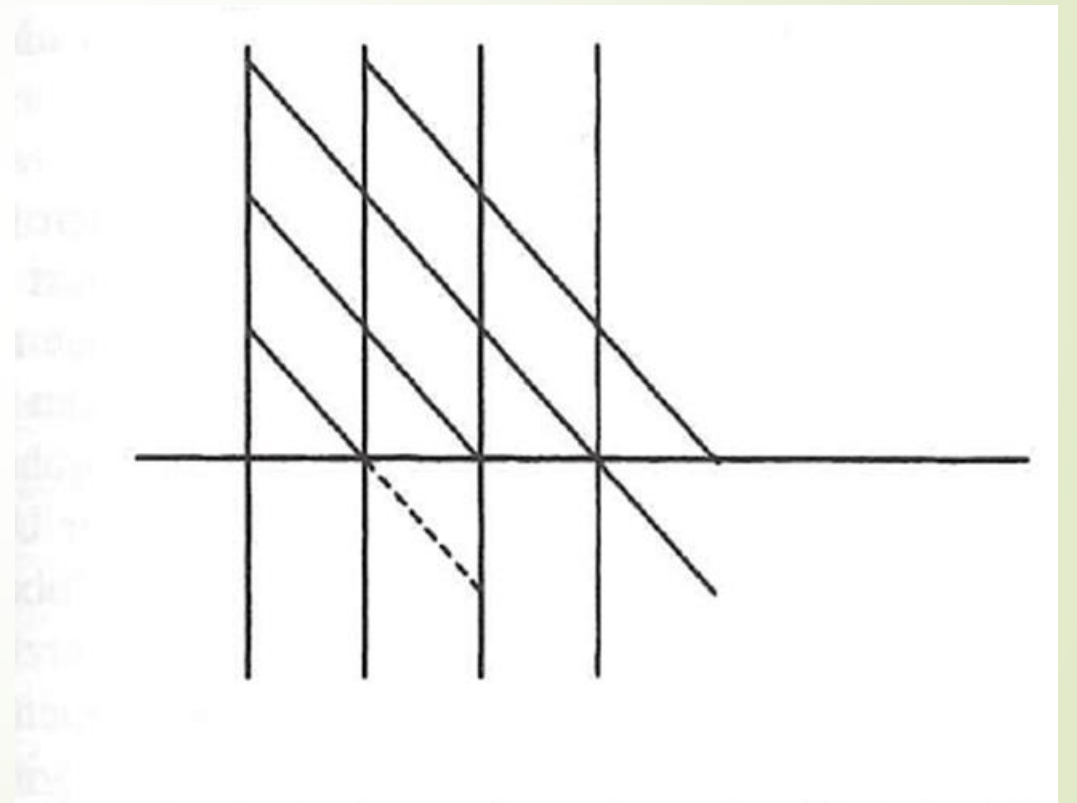
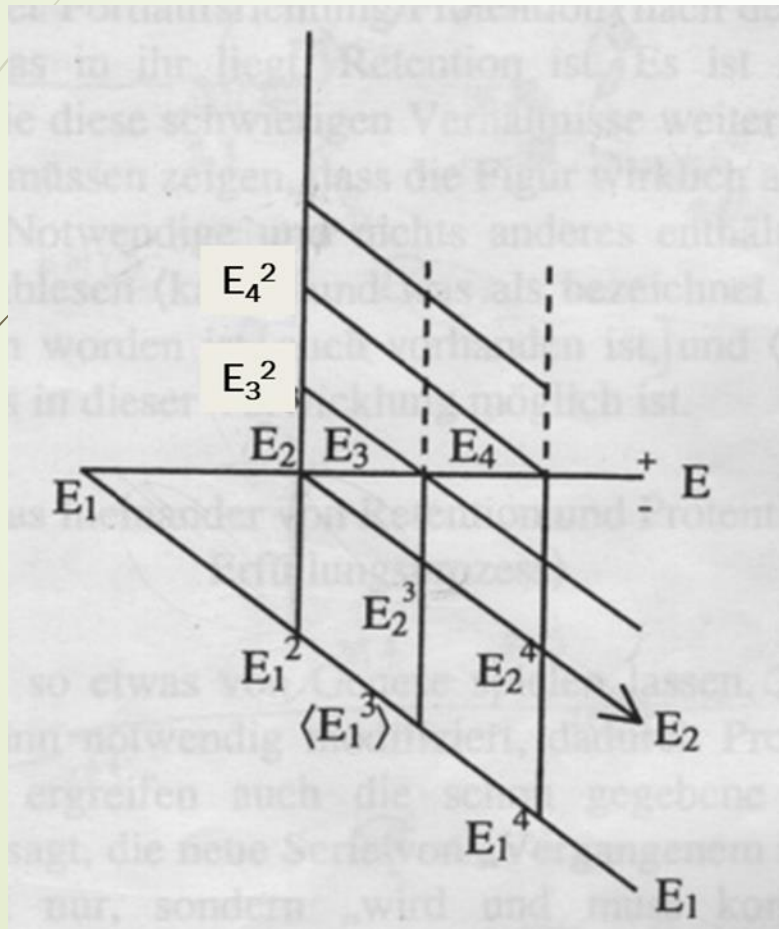
- あくまで自己知覚によるものなので、体験内容が不明瞭・不明な場合も、さしあたり、成立する。
- 体験内容が不明でも成立するので、無限に伸ばせる (XXXIII 45-46)。

## 2-12. 予持の図

(予持の側の類似の (ただし逆転した) 事情)



## 2-13. フッサールの図② (XXXIII 22, 33) (一部修正)

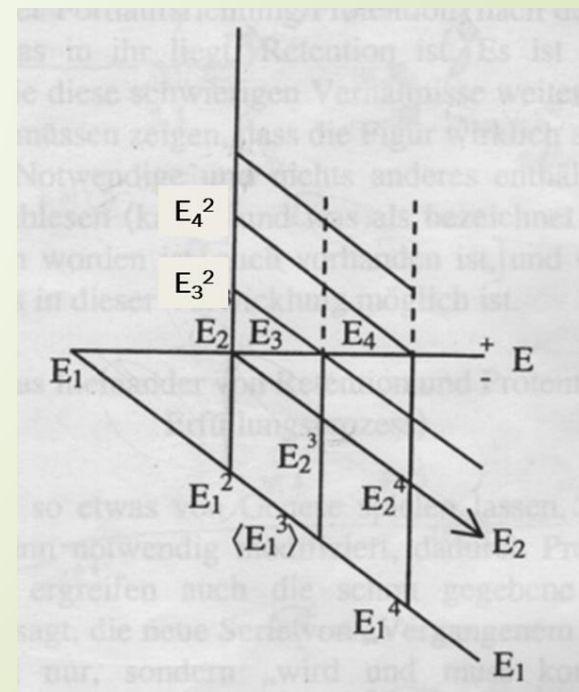


### 3. 「私」のネットワーク



## 3-1. 自己知覚再解釈①

- 自己知覚によって体験流が成立している
  - 「把持」「把持の把持」「把持の把持の把持」...、という連続体、  
「予持」「予持の予持」「予持の予持の予持」...、という連続体  
としての体験流が自己知覚によって成立している。
- さらに、「把持の予持」や「予持の把持」も成立している。
  - これらについて、もう少し踏み込んで考えたい。



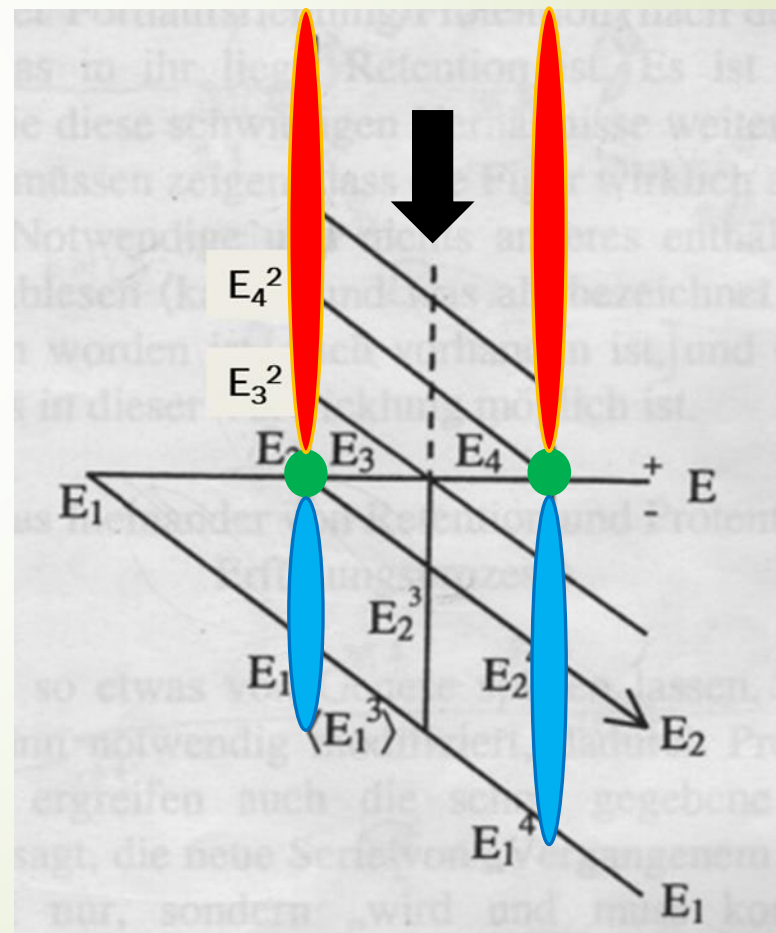
## 3-2. 自己知覚再解釈②

- 「...の把持」について整理すると、  
「原印象の把持」「把持の把持」「予持の把持」がある。つまり、

予持  
「原印象の把持」が成立している。  
把持

→図で表すと...

- 要約すれば、  
**かつての意識全体**が把持されている。
- 「...の予持」も同様。  
→**来たるべき意識全体**が予持されている。



### 3-3. 「私」のネットワークとしての体験流

#### ➡ 自己知覚による体験流の成立

→意識が、かつての・これからの意識の働きを志向するということ。

→今の「私」が、かつての・これからの「私」を捉えているということ。

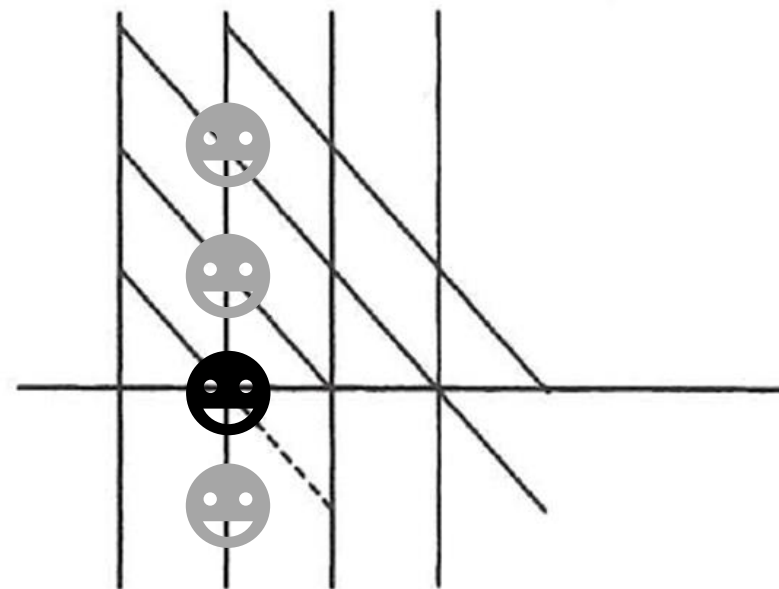
→捉えられたかつての・これからの「私」も他の「私」を志向する。

#### ➡ 自己知覚による体験流の成立

=異なる瞬間の「私」同士が志向的関係のネットワークを結んでいるということ。

(「私」同士は互いに外在的ではなく含意し合う)

➡ 諸々の「私」は同一の体験流を構成するので、他者ではない。しかし、位相がズレているという意味では、互いに区別できる。



## 3-4. (意識から見た) 客観的時間？

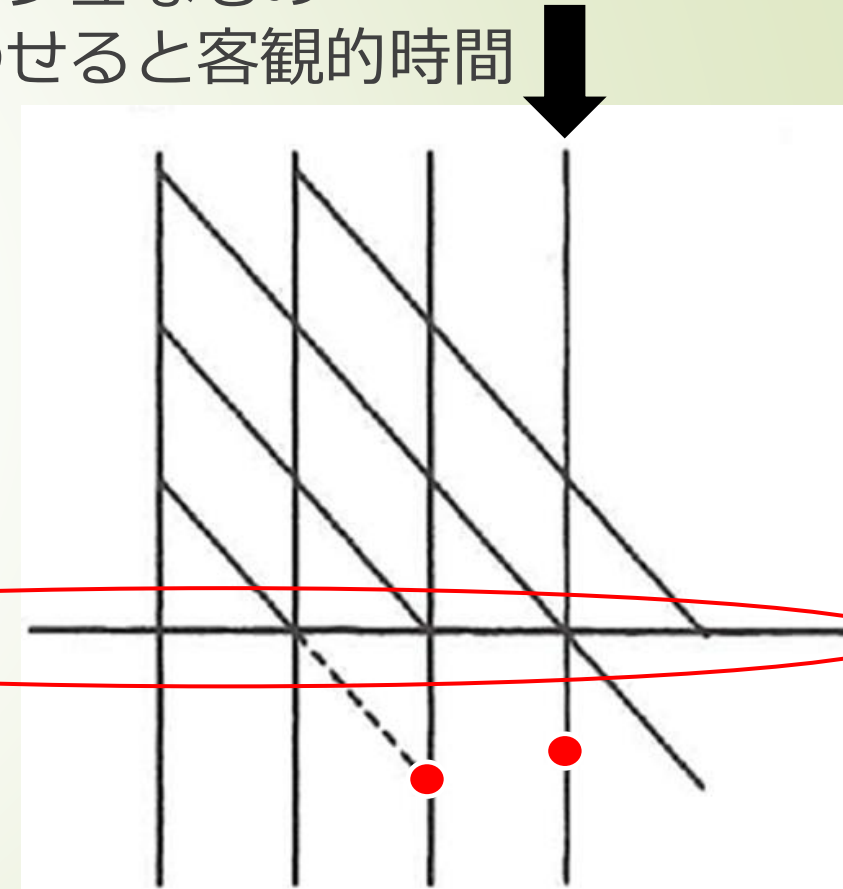
- ➡ 体験流に関してはひとまず分かったが、ここからどうやって客観的時間が出てくるのか？
- ➡ 客観的時間は、想起の系列が遡られることで成立する (X 69-71)。
- ➡ 想起：把持的な連続体を前提とし、これを辿ること。
  - 把持的地平の中の一つの位相を取ってみると、その位相も必ず把持的地平を伴う。その地平の中からさらに一つの位相を取っても、それはまた把持的地平を伴う。

## 3-5. 「今」の系列としての客観的時間

- 要するに、把持的地平の位相一つ一つを、フレッシュなもの（＝「原印象」）として捉え、それらを繋ぎ合わせると客観的時間ができる。

※中期では想起の話はせず、  
図表において「原印象」を繋いだものが  
客観的時間（「現象的時間」）だとしている。

- ★ 把持や予持として意識されていない（非主観的）、  
それ自体としての「原印象」の系列としての客観的時間





## 3-6. 「私」のネットワークとしての (意識から見た) 客観的時間

- ▶ 体験流における各位相は**同時に「端的な原印象」**ではありえない。  
「端的な原印象」が特権的で、他はあくまで  
「**かつての**」「**来たるべき**」として**志向された「原印象」**。
- ▶ 「他方、客観的時間を構成するのは全て「志向された」という性格が薄められた「**端的な原印象**」。どの「原印象」も等価で併存的。

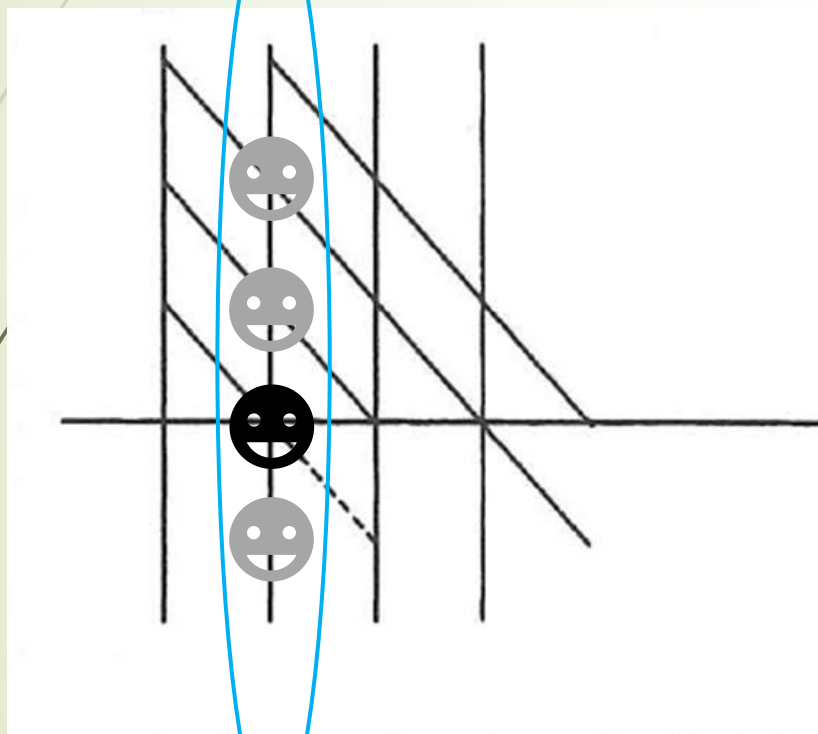
→ 「私」のネットワークの話と絡めると...

客観的時間とは様々な時間的パースペクティブを取る、  
**互いに独立の「私」**（「われわれ」？）から成るネットワーク。

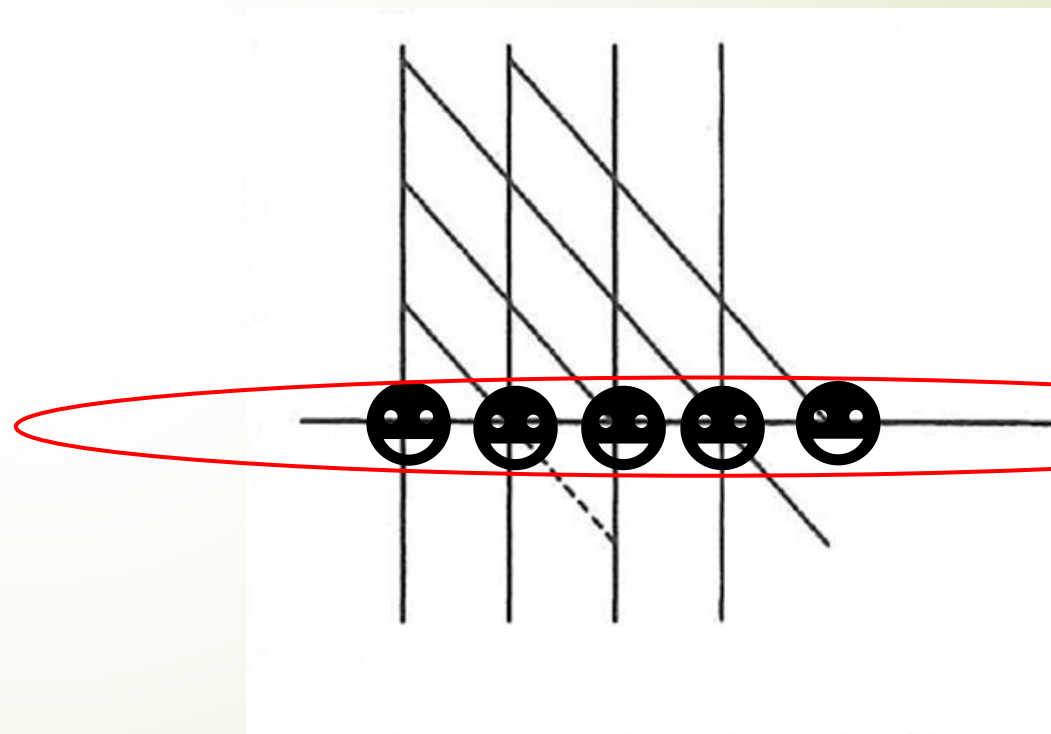


## 3-6. 圖解

體驗流



客觀的時間



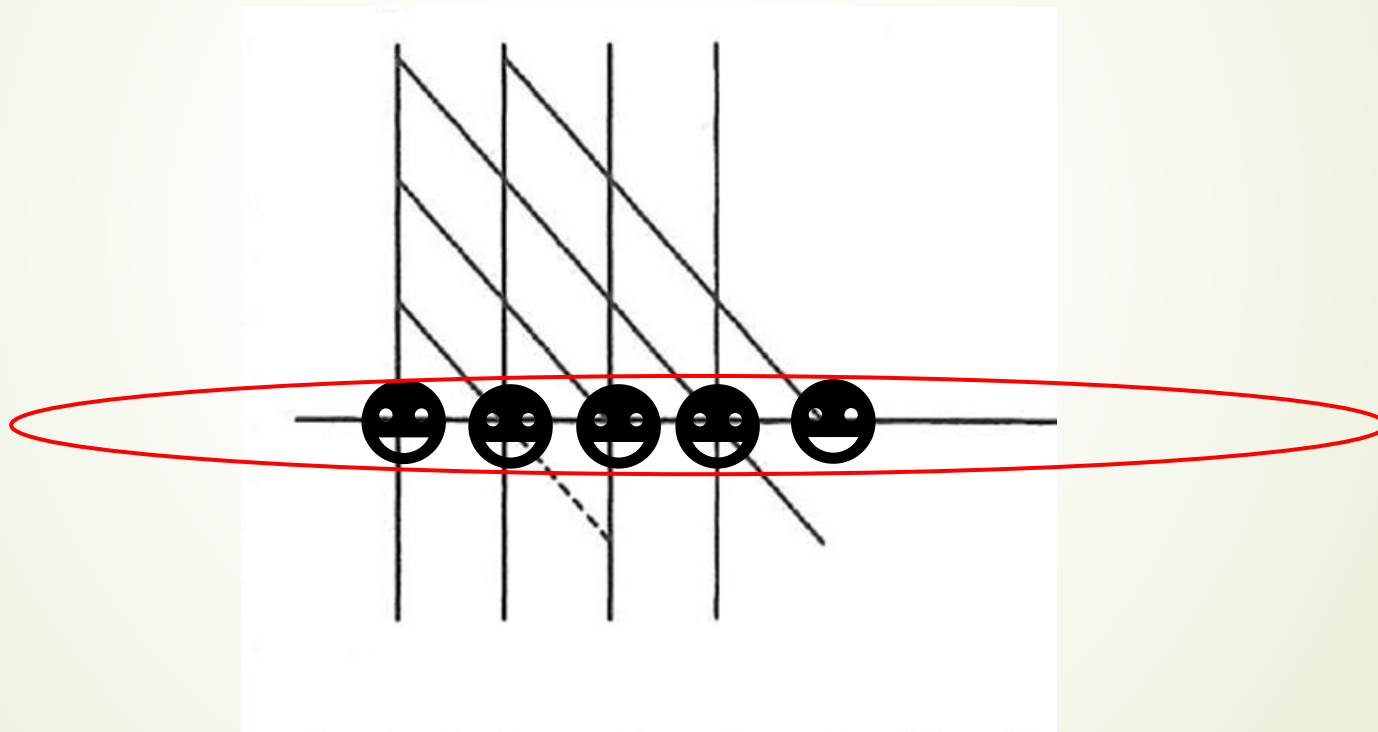
#### 4. 「空虚で整然としたネットワーク」から 「具体的で歪なネットワーク」へ

## 4-1. 「私」のネットワークという見方の利点

- ▶ 「私」のネットワークという見方にはいくつか利点がある。
  - ▶ たとえば、フッサール思想のいくつかのトピックや概念の解釈に際してヒントになる。
- Cf. 「間モナド的な時間」(XV 337)、 「間主観的な時間」(XXXIII 90)、  
再想起と感入Einführungの類似性、間主観性と客観性、など
- ▶ より一般的には、「時間」という問題と「自我-他我」という問題を親近的なものとして解釈できる。

## 4-2. たとえば...

客観的時間



## 4-3. 空虚すぎる「私」のネットワーク

- ▶ ただ、ここまでの話で登場した「私」はあまりに空虚。
  - 予持・把持・原印象を発動するだけの、単純な働きだけの「私」
  - 何らの固有な性格・特徴も持っていない「私」
- ▶ 常に発動している自己知覚による体験流は、  
**「普遍的な構造」たり得る**けれど、具体性に乏しい。
  - 具体性が盛り込まれた「私」を盛り込んで、**歪で具体的な時間**を考えることも可能なのでは？
  - 「**歴史**」というのはこの「歪で具体的な時間」の一例なのでは？

## 4-4. フッサールにおける歴史

- ▶ フッサールの歴史という語には、二種類の使われ方がある。
  - 1. **世代間**の、継承する・される営みもしくははそうやって形成されるもの。『幾何学の起源』などの主題。いわゆる歴史。
  - 2. **一つの主観性において**、何らかの信念や意味などが形成され、沈殿していくプロセス、もしくははそこで形成され沈殿するもの。発生的現象学の主要問題。いわゆる履歴。
- 基本的にフッサールは主観性の構造から歴史を考えようとする。  
2から1を理解するような方向性。



## 4-5. 「私」のネットワークとしての歴史

- ▶ 主観性の構造から歴史一般を考えることは、今日の話を踏まえればそれほど奇妙なことでもない。
  - そもそも体験流とは、相互に区別され得る「私」のネットワーク
  - 歴史とは、より明確に区別された「私」が、志向する・される以上の関係（＝何かを継承する・される）を取り結んで成立している、「私」のネットワークの特殊な一形態として理解できるのでは？
- ▶ ただし、体験流における志向する・される関係とは違い、継承する・されるという関係は切れやすく、非均質。また、無限に伸ばせるわけでもない。そういう意味で「いびつ」。あるいは「**偶然的**」。少なくとも普遍的ではない。

## 4-6. 主観性における「歪な歴史」？

- ▶ 反対に、主観性の側にも歪さや偶然性を見出すことはできるのではないか？
  - 個人の履歴も、世代間の歴史と同じ、あるいはそれに類する仕方で歪であったり偶然的であったりするのではないか？
  - 「切れてしまった」、もはやそこからは何も継承していないような過去の「私」というものの可能性が潜んでいるのではないか？

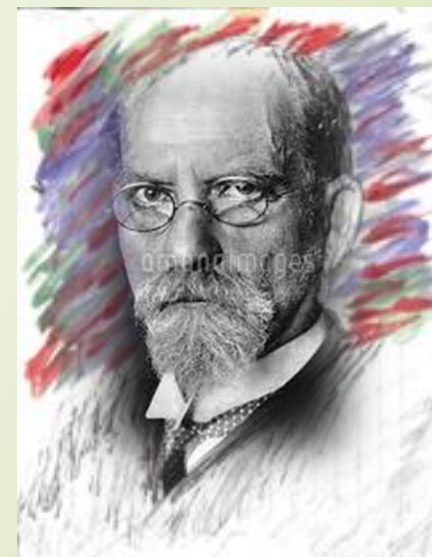
※この点については鈴木崇[2022]を参照。

## 4-7. おわりに

- ▶ 他にも、その都度の「私」が原印象的に何を捉えているか、その都度の「私」がどんな行為をしていて、それが前後の行為とどう関係するか、といったことも考えられる。
- ▶ いずれにせよ、時間を「私」のネットワークとして考えることで、「普遍的で空虚」な時間と、「具体的で歪」な時間、という二側面を統一的に捉えることができるのではないか？

ご清聴ありがとうございました

本研究はJSPS科研費 JP23K11992の助成を受けたものです。



# 参考文献

43

► Bd. III: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erste Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*, neu hrsg. Von Karl Schumann, 1. Halbband: Text der 1. -3. Auflage, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1976. [=III/1]

(邦訳)『イデーンI-I』、渡辺二郎訳、みすず書房、1979年。

► Bd. IV: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Zweites Buch: Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution*, hrsg. von Marly Biemel, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1952. [=IV]

(邦訳)『イデーンII-I』、『イデーンII-II』、立松弘孝・別所良美・榊原哲也訳、みすず書房、2001年、2009年。

► Bd. X: *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins (1893-1917)*, hrsg. von Rudolf Boehm, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1966. [=X]

(邦訳)『内的時間意識の現象学』、立松弘孝訳、みすず書房、1967年。

『内的時間意識の現象学』、谷徹訳、筑摩書房、2016年。



# 参考文献

- Bd. XXXIII: *Die Bernauer Manuskripte über das Zeitbewusstsein (1917/18)*, hrsg. von Rudolf Bernet und Dieter Lohmar, Dordrecht / Boston / London, Kluwer Academic Publishers, 2001. [=XXXIII]
- Held, Klaus[1966], *Lebendige Gegenwart*, Den Haag, Martinus Nijhoff.  
(邦訳)『生き生きした現在』、新田義弘・小川侃・谷徹・斎藤慶典 共訳、北斗出版、1997年。
- 谷徹 [1998]、『意識の自然』、勁草書房。
- Kortooms, Toine[2002], *Phenomenology of Time*, Dordrecht/ Boston/ London, Kluwer Academic Publishers.
- Dodd, James[2005], “Reading Husserl’s Time-Diagrams from 1917/18”, in *Husserl Studies*, Vol. 21, No. 2, Springer, 111-137.
- 田口茂 [2004]、「〈私〉の比類なき増殖——フッサールにおける志向的変様論とモナド化の問題」、『現象学年報』、第20号、日本現象学会、15-27頁。
- ——[2010]、『フッサールにおける〈原自我〉の問題』、法政大学出版局。
- 鈴木崇[2020]、「対話のような想起——フッサールの記憶論に関する一考察」、『立命館文學』、第665号、立命館大学人文学会、二五三—二六四頁。



# 参考文献

- 村田憲郎[2017]、「『時間意識についてのベルナウ草稿(1917/18)』を読む」、『フッサール研究』、第14号、フッサール研究会、201-217頁。
- 柳川耕平[2017a]、「フッサール初期時間論から中期時間論への予持概念の変化」、『フッサール研究』、第14号、フッサール研究会、29-45頁。
- ——[2017b]、「『ベルナウ草稿』における二重の予持」『現象学年報』、第33号、日本現象学会、101-109頁。
- ——[2022]、「フッサールにおける時間と歴史について」、『立命館文學』、第680号、立命館大学人文学会、一二——三五頁。
- ——[2023]、「フッサール現象学の鍵概念(1)——時間 ——体験流を中心として——」『フッサール研究』、第20号、フッサール研究会、44-66頁。